

2009年度の検査室は技師1名を採用し、7人体制でのスタートとなった。

まずは、超音波検査を担当する技師を拡充すべく、昨年度から引き続き研鑽に励んだ。

また、検体検査スタッフの業務にかたよりが無いよう半日1名の支援を行い、病棟回診参加や適正な代休取得に努めた。

リスク管理の点からも、毎朝の部署内朝礼を行い、リアルタイムの情報伝達と共有及び問題解決の場とした。その他、ワーク・ライフ・バランスの概念を取り入れ有休休暇と代休消化率を高め、これらを利用した自己研鑽の機会を増やすべく努めた。

【検体検査】

5月より順次稼動する電子カルテ化体制に滞りなく接続できるように既存の検体検査システムの改修を行った。

今年度の電子カルテ導入に関し、輸血・細菌・病理の各システム構築を完了し、電子カルテの本稼動に対処した。引き続きシステムと運用の改善に取り組んでいきたい。

免疫血清分析装置は、導入の意義があると考えが高額なため整備に至っていない。中長期の機器整備計画が重要と思われる。

回診業務に関しては、NST及びICTに常時1名が参加、情報提供を行っているが、医師不在時は、可能なところから他部署と共に情報収集するよう努めている。これは、検査室全員のバックアップがあってこそ成り立っている。

【生理検査】

検査時間の遅延と常時検査実施ができるように努めた。これは現在の主担当者の日々の労力に負う処が多く、後継技師の技術習得に期待される。現在の超音波担当技師の超音波検査士資格認定を含めたスキルアップの為に継続した教育・研修の時間、資材等の物心両面での支援も続けていかなければならない。

電子カルテ化に向けての取り組みは、カスタム改修をすることなく、限られたシステム能力でどこまで検査結果の電子化をしていくか関係各方面と協議を重ねてきた。

【今後の展望】

特に超音波検査技術は、すぐに習得できるものではないが、順次新たな技師が研修に加わり検体検査分野とのローテーションを進めていきたい。生理検査担当者も時間外帯を不安なく対応できるように検体検査の理解を深め、地域医療に最良の臨床検査の提供を目指していきたい

主な生理検査年度別推移

